PNG (Papua New Guinea)での国境なき医師団の結核プロジェクト　2015 年　松井昂介

PNG は結核高蔓延国の一つで、罹患率は 2014 年のデータで 361/10 万人、首都の NCD (National Capital District)に限ると 1200/10 万人を超えるとされています（日本は 16.1/10 万人！）。閉ざされた空間に複数の家族が居住するという生活スタイル、人々の結核に対する理解不足、結核診療に関わる医療スタッフや施設の不足などが高罹患率の原因であると考えられ、MSF は NCD にて NDOH (National Department of Health)をサポートする形で結核の診療、教育などに関わっています。

私の仕事は、最も結核患者の集まる病院の一つである Gerehu Hospital における結核診療です。月に 500 人を超える患者を 2 人の HEO（医師ではないが診療行為を行う職種）と共に診療しながら、スタッフの教育、診療体制の向上、他部署との連携の構築などを行っています。肺結核はもちろん、多数の肺外結核や耐性結核、HIV 合併結核、小児結核などのマネジメントを最前線で行う ”TB specialist” として、日々勉強しながら最善の診療を提供できるよう努めています。

結核の診断は具体的に、①臨床経過と症状、身体所見、②塗抹所見と GeneXpert、③レントゲンで行っています。おそらく MSF の他のミッションと比較し検査へのアクセスは比較的恵まれておりますが、もちろん日本に比べると非常に限られた医療資源であり、今まで培った身体診察とレントゲンの読影技術を武器にしてなんとか戦っています。

公用語は英語、ピジン語ですが、学校を出ていない人はピジン語しか喋ることができず、たまに通訳を必要とします。他のスタッフや他科のドクターとのコミュニケーションには英語を使用していますが、英語力もまだまだ改善が必要であると日々痛感しています。

非常に苦労の多いミッションですが、国際協力の楽しさや難しさを肌で感じる日々、様々な医療スタッフや非医療スタッフとの交流など日本では決してできない経験であり、自分を大きく成長させてくれる舞台であると実感しています。

松井昂介